石工が築いた梯子田の灌漑施設

庄地（しょうじ）のスイドウ

周防大島町のなかで久賀地域は山が深く、水量も比較的豊富で梯子田と呼ばれる棚田が発達しています。急斜面からも米の収穫を図ろうとした人々の努力で耕された棚田です。ただ、中国地方特有の真砂土に築かれた田は、水が地下に浸みとおりやすく、水の供給に苦労が伴います。この棚田の灌漑用水の管理方法として考えられたのがスイドウと呼ばれる石組暗渠です。優れた石積み技術を習得した石工に恵まれた、久賀だからこそ可能となった灌漑施設といえます。

そのなかで代表的なものが、山口県の有形民俗文化財に指定されている「庄地のスイドウ」です。最も古い石垣の積み方と用水溝の組合せで、築造時期は鎌倉時代末期から室町時代と推定されています。このスイドウは、標高 100 mから 50 mの棚田を潤すために、傾斜地に総延長 160 mに及ぶ暗渠が造られています。他では個人が所有するような谷に築かれるため、10 個以内の暗渠が多く見られますが、ここでは確認されているだけで 40 ヵ所におよんでいます。

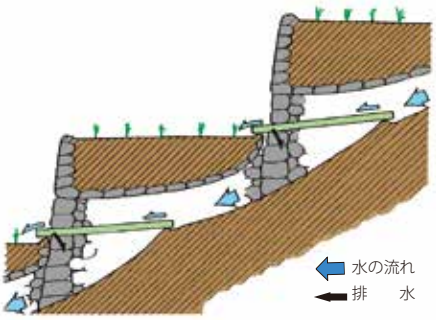
これらの石垣は、ほとんどが野面石の乱れ積みであり、大きい石を使用しつつも空隙の少ない谷積みの築造技術と構造力は、石工の技術をうかがい知ることができます。明治期から日本各地の近代土木工事にも参加した久賀の石工の卓越した技量を証明するものともいえます。

『東和町誌　石造物』によれば、久賀の東部にあたる東和町大積、小積では明治以降耕地整理が行われ、山麓の何枚かの田を一つにして大きな田にかえる「マチ倒し」が行われています。さらに田として十分活用できなかったり、畑であったところにスイドウを通して一枚の田に変えています。このように、マチ倒しをするためばかりでなく、条件の悪い谷奥を新たに田に拓くために造られたスイドウもあります。

しかしながら、梯子田は日射量不足や獣害などの悪条件を抱えていたためか、戦後は植林、あるいはミカン栽培に転作されていきました。

■位置図

昭和 30 年代の梯子田（周防大島文化交流センター蔵）



スイドウの仕組み
流れてきた水は堰き止められ、一定の水量が竹樋などを通って田に入り、樋に入らない水は堰を越えて流れ落ちていく。また、田の水を減らしたり抜くときは、取水口が排水口になる。暗渠の内部は天石を支えるために石組みになっている。

かんがい施設「庄地のスイドウ」

「庄地のスイドウ」平面図
（周防大島町教育委員会資料参照）

スイドウの取水口